

このごろのおもうこと すこし

広島市立安西中学校教諭 岩本 和 貴

(学校教育学部 昭和61年3月卒業)

“教師は、最初の3年が勝負”
中学校の教師になって3年が瞬く間に過ぎてしまった。仕事に追われるうちに、馴ればかりが身についた。大した勉強をしていないことは自慢にもならない。せっかくこの稿を依頼されたのだ。良い機会だから自身の勉強のためにも、学習指導要領の大改訂の一部について私見を述べたい。

今回の指導要領の改訂の中で注目されている点のひとつとして、中学校における書写指導の位置づけが挙げられる。書写は従来表現領域にあったものが、言語事項に組み入れられた。また、時間数も単位時間として明確にされた。更に、旧指導要領の「硬筆」「毛筆」「適切な用具を選び」「用具の特質を生かし」「その美しさを感じ取る」といったような言葉が削られた。これらのことから考えられる今回の改訂の意図は、「生活に役立つ道具としての書写指導の充実」にあると言えよう。そのため、書写の中に含まれている芸術的(書道的)要素は排除し、硬筆書写の能力の基礎を養うために毛筆を利用しようという内容になっている。芸術として高等学校で指導する書道と、小・中学校で指導する書写とは明確に区分した、というのがその立場であろう。こうした改訂の内容は、書写については、一応に是として受け入れられているようだ。

しかし私はこのような意見に対して疑問を持つ。安易なのだ。ワープロや丸文字の出現による字形の乱れに対処するという考え方が、ならば手近なところ、つまり書写から文字指導という道具的な部分だけを取り出して対策とするのは、深慮に欠けはすまいか。

一般に「書」といったとき、それは数多くの

顔を持っている。中でも文字伝達機能としての面と、いわゆる芸術としての面という二つの面は表裏一体であり、互いに絡み合いながら「書」を支えてきた。有体には言え、文字を正しく整えて「調和よく」書くために、美しさを理解することは不可欠だろう。また、美術科や音楽科と同様、情操教育・表現教育の一環としても、書写は大きな働きを担ってきた。この「書」という日本の伝統文化の中から、大きな2本の柱であるうちの1本を取り出して指導することは、効果的な指導法であるようで、実は、文字を書く、あるいは表現する姿勢を崩す、ないがしろにしてしまうことにつながるのではないか。いざ、高等学校へ進学し、伝統文化の中での「書」を指導されたとき、生徒は戸惑うことなくそれを受け入れることができるだろうか。また義務教育だけで学校教育を終える生徒は、伝統文化としての「書」に触れることなく生涯を過ごすのか。第一、「指導計画の作成と内容の取り扱い」の3.(7)「我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てる」こととは完全に矛盾するのではないか。

私にとりて今回の改訂は残念だ。しかし、もっと残念なことがある。考えてみれば、世の中のこうした流れに、学生の頃は全く意見を持たなかった。否、持ちようがない。勉強をしていなかった。再び大学に戻れば恐らく、トイレに行く間も惜しんで勉学にいそしむだろうに。卒業して初めてこんなことを思う。でももう遅い。浅薄にも悔いつつペンを置く。

最後に私を「書」の道に誘っていただいたときの、森井一幸教授の言葉で締めくくりたい。

“岩本よ、書道に命を懸けえや” 多謝。